「男、突っ走る！」

第76回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（23）　『オフィスツリーイン』代表
木内　真保（50）　雅也の母
眞榮田　浩平（22）　元名古屋芸術専門学校学生
福沢　瑞枝（22）　元名古屋芸術専門学校学生
大久保　正樹（26）　元名古屋芸術専門学校学生
国枝　佐代子（58）　市民映画プロデューサー
山中　敦夫（43）　劇団主宰者
本村　晴臣（54）　音楽プロデューサー
橋崎　悟（48）　ＷＥＢ会社社長
橋岡　直政（46）　舞台俳優
野倉　浩太（21）　『スリジェネ』メンバー
藤田　昇平（21）　『スリジェネ』メンバー
前川　啓司（29）　『スリジェネ』メンバー
山森　直海（18）　『スリジェネ』メンバー
富永　茜（22）　『スリジェネ』メンバー
佐藤　麻美（21）　『スリジェネ』メンバー
大坂　美央（16）　『スリジェネ』メンバー
石井　麗子（24）　『スリジェネ』メンバー
花木　忍（23）　『スリジェネ』メンバー
熊瀬　怜奈（17）　『スリジェネ』メンバー
河辺　真理恵（21）　『スリジェネ』メンバー
長野　優美（17）　『スリジェネ』メンバー

1　居酒屋『とんちゃん』・全景（夜）

2　同・店

大将が焼き鳥を焼いており、若女将が接客をしている――カウンター席で雅也と瑞枝が飲んでいる。

雅也「（スマホを見て）眞榮田と大久保、そろそろ着くってさ」

瑞枝「車？」

雅也「大久保の車で一緒に来るって。今日、二人とも現場一緒だったみたいだから」

瑞枝「テレビ局勤務も大変だよね。ゴールデンウィークに仕事なんて」

雅也「まあ、テレビ業界とサービス業にとっては、休みなんてあってないようなもんだしね」

瑞枝「うっちーも、一人でやってるから一緒か」

雅也「でも一人だと、休みの調整はできるからね、今日みたいに。でも、眞榮田たちは

そうはいかないし」
瑞枝「まあねぇ」
と、浩平と正樹が入ってくる。
大将「いらっしゃいッ」
若女将「いらっしゃいませ」
雅也「（気づいて）こっちこっち」
と、カウンター席に座る浩平と正樹。
正樹「良いところじゃん、俺、こういうとこ
ろ好きだよ」
雅也「あ、大久保は初めてだっけ？」
浩平「俺は一回来たな。確か、あの時はテー
ブル席だったけど」
雅也「ああ、あったね」
浩平「おっくーとか、長井もいた気がする」
雅也「そうだそうだ。おっくーとふゆちゃん
もいたわ」
正樹「（瑞枝に）福沢は、来たことあるの
か？」
瑞枝「そりゃ、うっちーとは二人で何回来た
ことか。まあ今日は、専門卒業して東京に

行ってからは初になるけどね。せっかく連休でこっち帰ってきたし、しばらく来てなかったら」

正樹「へえ。福沢と木内って、サシで飲むぐらい仲良かったんだ」

浩平「（正樹に）お前は学校にいることがどちらかといえば少なかったから分かんないだろうけど、うっちーと福沢はよく四階にたんだぞ」

雅也「いたね。思えば、今日俺以外映像専攻だけど、当時から不思議と映像専攻のメンツとは仲良くさせてもらってたわ。さ、昔話は後にして、注文注文（とメニュー表を浩平たちに渡す）」

×　×　×

焼き鳥を食べながら話している雅也、浩平、瑞枝、正樹。

正樹「は？　お前がミュージカル？」

雅也「うん」

浩平「どうして、またそうなったんだよ？」

雅也「だから……運営スタッフとキャストのパイプ役が必要ってことになって、それで年代的に運営とキャストの兼任ができるのは俺しかいないから、それで」

瑞枝「でも、うっちーって演技経験ないでしょ？」

雅也「ないよ。小学校の学芸会以来かな。あ……『ＣＲＥＧＧ』は、カウントに入るかな」

浩平「俺たちが、学生生活最後に作った半ドキュメンタリーの自主ドラマだろ。あれは、俺たち本人役だから、演技って言うのかな？」

雅也「でもさ、一応脚本があって、それに沿って演じたわけじゃない。あれだってさ、タイトルロゴも脚本も撮影も監督も全部自分でやるって言ったくせに、すぐ俺に脚本依頼してきたんだよ、『やっぱり書いてください』って」

浩平「そうだったな」

正樹「それでも、よくやったよな、俺たち」
瑞枝「本当だよね。あの頃は学生だったから、不思議と何でもやれちゃうって自信があったんだよね。ちょっと難しそうなことでもさ。でも、いざ会社に入ると、リスクのこととか上司とか先輩のこと考えて、何でもやれちゃうっていうチャレンジ精神が無くなってる気がする」
雅也「だから俺も、正直思いがけない形で市民ミュージカルの出演が決まったから、不安でしかないんだよ。みんな経験者ばっかりでね。学生のときみたいに、何でもやれちゃうっていう自信は全くない。とにかく、みんなの足を引っ張らないようにしないとっていう気持ちだけが先行しちゃってる」
浩平「ミュージカルってことは、芝居だけじゃなくて歌やダンスもやるんだろ？　うっちーできるのか？」
雅也「運動音痴の俺だよ。歌だって別に上手いわけじゃないしさ、前途多難っていうの

はこういうこと言うんだろうね」

浩平「うっちーが、どんな芝居するのか楽しみだわ」

雅也「勘弁してよ。今週末の日曜日が初回稽古だけど、体力が持つかどうか、それだけが心配でさ」

正樹「まあ、楽しめば良いんじゃないか。舞台に出る側とはいえ、結局はキャストもスタッフも、客に見てもらうために舞台を作る人間になるんだから。番組と一緒だよ。カメラの前に出るキャストとその後ろにいるスタッフたちで、視聴者という客のために一つの作品を作ってるんだから。木内もさ、あの頃みたいに楽しんで臨めば良いんだよ。不安な顔してると、かえって周囲の人間を心配させることにもなるんだから。最後は笑顔だぞ」

雅也「ありがとう。まずは、メンバーと仲良くなって、少しでも自分自身の不安を解消できるように頑張りますか」

と、ジョッキに余っていたビールを飲み干す。

3　木内家・表（夜）

正樹の車が停まる――運転席に正樹、助手席に浩平、後部座席に雅也と瑞枝。雅也が降りてくる。

雅也「ありがとね」

正樹「頑張れよ、ミュージカル」

雅也「うん」

浩平「じゃあな」

瑞枝「バイバイ」

雅也「気を付けてね、ありがと」

と、車のドアを閉める。

出発していく正樹の車――見送っていく雅也。

4　中央公民館・全景（数日後）

N「そして、ゴールデンウィーク最終日の日曜日、市民ミュージカルに出演するパフォ

ーマンスグループ『スリジェネ』の稽古初日がやってきました」

5　同・会議室

雅也、佐代子、山中、橋岡、浩太、昇平、啓司、直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜　奈、真理恵、優美が集まり、自己紹介をしている。

佐代子「改めて、今回の市民ミュージカルの総合プロデューサーを務める国枝佐代子です。よろしくお願いします」

×　×　×

山中「脚本、演出を担当します山中敦夫です。気軽に、ヤマさんって呼んでください」

×　×　×

直海「山森直海です、高校三年生で演劇部やってます。ニックネームは、ナオです。よろしくお願いします」

×　×　×

麻美「佐藤麻美です。友人たちからは、アサ

ミンって呼ばれてます。久しぶりの舞台頑張りたいと思います」

×　×　×

真理恵「河辺真理恵です。歯科衛生士の専門学校通ってます。ミュージカルが大好きです。よろしくお願いします」

×　×　×

茜「富永茜と言います。今、大学四年生で、管理栄養士の国家試験勉強中です。音楽大好きです。よろしくお願いします」

×　×　×

美央「高校一年生の大坂美央です。中学の時は吹奏楽部、高校に入ってからは演劇部に入ってます。よろしくお願いします」

×　×　×

麗子「石井麗子です。中学で英語教師をしています。子どもの頃からミュージカルが好きでしたが、自分が舞台に出るのは初めてです。分からないこともあると思いますが、よろしくお願いします」

×　　×　　×

忍「花木忍です。高校時代は演劇部に所属していて、今は映画やドラマのボランティアエキストラもしています。挑戦することが大好きです」

×　　×　　×

優美「高校二年生の長野優美です。市民ミュージカルには、これまで何度も出演してきました。今回も楽しみたいと思います。よろしくお願いします」

×　　×　　×

昇平「藤田昇平です。大学三年生です。名古屋の劇団で、客演として舞台に出演させていただいてます。よろしくお願いします」

×　　×　　×

啓司「前川啓司です。東京の養成所に通ってました。演技は久しぶりですが、頑張りたいと思います。よろしく願いします」

×　　×　　×

浩太「野倉浩太です。映像の演技は経験あり

ますが、舞台のお芝居は初挑戦になります。
よろしくお願いします」

×　×　×

雅也「木内雅也です。運営兼任で、皆さんと運営のパイプ役になれたらと思っています。演技初挑戦で、とにかく皆さんの足を引っ張らないように頑張ります。運営ですが、皆さんと同じ『スリジェネ』のメンバーなので、気軽にうっちーと呼んでください。
よろしくお願いします」

×　×　×

橋岡「客演としてご一緒します、橋岡直政と言います。はっしーと呼んでいただければと思います。皆さんのような若い人たちとご一緒できることを嬉しく思います。共に頑張りましょう」

×　×　×

N「初日の稽古は、体力づくりや活舌、発声練習といった基礎的なことが行われました」

メンバー一同と橋岡が腹筋をしている

――その様子を見て回っている山中。

×　×　×

『あめんぼ』を唱えている一同。

一同「あめんぼ赤いなあいうえお　浮きもに
小エビも泳いでる。柿の木栗の木かきくけ
こ　キツツキこつこつ枯れ欅……」

×　×　×

発声練習をしている一同。

一同「あいうえお、いうえおあ、うえおあい、
えおあいう、おあいうえ。かきくけこ、き
くけこか、くけこかき、けこかきく、こか
きくけ……」

N「全てが未経験の自分にとっては、今日の
基礎練習の時間も新鮮に感じました。ただ、
腹筋や腕立てといった筋トレは、運動が苦
手な自分にとっては辛いひと時でした」

6　同・ラウンジ

テーブルを囲んでパンなどの軽食を食
べたり、水分補給をしている雅也、茜、

麗子、真理恵、直海。

雅也「久しぶりに、こんなに体力使ったかもしれない」

麗子「運営兼任って言ってましたけど、うっちーさんは普段何やってるんですか？」

雅也「個人事業で広告制作とライターをやってます」

直海「ああ、そういえばオーディションの時に、そんなようなこと言ってたね。確か、脚本も書いてるとか」

茜「え、脚本書いてるの？」

雅也「少しだけどね。専門学校で、シナリオライター専攻ってところにいて、三年間ひたすら文章書いてばっかだった」

真理恵「専門学校って、大学と違ってひたすら実技ばっかだもんね」

雅也「あ、そっか。マリエは確か、歯科衛生士の専門学校だったね。国家試験大変なんじゃない？　うちの広島に住んでる従姉も、歯科衛生士の学校通ってたけど、試験が難

しいって言ってた」
真理恵「そうなの、本当に試験難しくて」
直海「確かに、試験って難しいもんね。私なんて、定期テストの勉強でいっぱいいっぱい」
雅也「定期テストか、懐かしい響きだな」
麗子「今、私は作る側ですけどね」
直海「先生ですもんね」
茜「学校の先生やりながら、こっちの稽古って大変なんじゃないですか？」
雅也「仕事も大変でしょ」
麗子「まあね。でも、自分でやろうと決めたので」
真理恵「（茜に）とみーは、管理栄養士の国家試験勉強中って言ってたよね。それも結構大変なんじゃない」
茜「覚えることが多すぎて」
雅也「管理栄養士の試験って、普通の栄養士よりも難しいんでしょ。覚えなきゃいけない参考書がすごく分厚いみたいだし」

茜「うっちー、よく知ってるね」
雅也「前に知り合いから聞いたことあるの」
と、電子ピアノを担いだ本村が入ってくる。
本村「お疲れ」
雅也「ハルさん、お疲れ様です」
本村「どうよ。初日は」
雅也「体動かさない僕にとっては、体力の消耗凄すぎて」
本村「頑張りなよ。（と一同に）じゃあ、後ほど」
と、奥の音楽室へ入っていく。
茜「あの方、確か音楽プロデューサーの……」
雅也「そう。今回の市民ミュージカルの音楽は全部作曲するんだって」
茜「すご……」
麗子「とみー、音楽やってるなら、話し合うかもね」
茜「うん」
真理恵「本当に、ここっていろんな人たちい

るね」
雅也「それが面白いんだけどね。上の人たちとも、もっと仲良くならないと（と上を見上げる）」

7　同・会議室

ストレッチをしている麻美と浩太――
水分補給をしている昇平。

麻美「久しぶりだね、浩太」
浩太「まさかアサミンまでいるとは思わなかったけど」
麻美「国枝さんから、オーディション受けてみないって言われて」
浩太「俺も。まさか、メンバーとして決まるなんて思わなかったけど」
麻美「私も」
昇平「二人は、もともと何かで一緒だったの？」
浩太「国枝さんがプロデューサーをした市民映画で、一緒だったんだよ。もう二年ぐら

い経つかな」
麻美「クランクインの頃考えたら、もう三年経つんじゃない？」
浩太「もうそんなに経つか」
昇平「映像かぁ……俺はやっぱり舞台だな」
浩太「どうして？」
昇平「一回始まったら、幕が下りるまで物語に沿って感情を動かすことができるだろ。映像だと、さっきまで楽しいシーンだったのに、次は悲しいシーン撮ったりして、感情が追いついていかないような気がしてさ」
浩太「なるほどなぁ」
麻美「まあ、その気持ちは分からなくもないけどね」
昇平「あれ、休憩何時までだっけ？」
麻美・浩太「五時半」

8　同・音楽室

本村がピアノを弾き、それに合わせて楽譜を見ながら歌の練習をしている雅

也、浩太、昇平、啓司、橋岡。

N「休憩後、僕ら男性チームはハルさんによる歌唱稽古でした。ですが、ハルさん曰く男性陣の歌唱力は酷かったようです。無論、そんなことは自分自身が一番よく分かっていました……」

9 木内家・全景（翌朝）

N「そして、翌朝のことです」

10 同・雅也の部屋

真保が入ってくる。

真保「雅、ご飯できたわよ」

ベッドで横になったままの雅也が、腕を伸ばしている。

真保「どうしたの？」

雅也「ごめん、起こして……」

真保「何があったの？」

雅也「体が……動かない」

真保「動かないって、どうして？」

雅也「筋肉痛に決まってるじゃない……腹筋とか腕立てなんて、何年振りにやったと思ってるの」
真保「ああ、市民ミュージカルの稽古か」
雅也「そう……」
真保「だから、定期的に体動かしなさいって言ったじゃん。普段、デスクワークばっかりで、体が鈍るんだから」
雅也「いつも言ってるでしょ。俺は、この世で一番体を動かすことが嫌いなの」
真保「そんなこと言ってるから、腹筋と腕立てやっただけで、筋肉痛になんかなるの」
雅也「しょうがないでしょ。事の成り行きってやつなんだから」
真保「どうしようもないわね」
雅也「良いから起こしてよ」
真保「はいはい」
と、雅也の腕を引っ張る。
雅也「痛ッ……！」
真保「何？」

雅也「もっとゆっくり引っ張ってよ」
真保「筋肉痛なんて、ほっとけば勝手に直るの。それが嫌なら、普段から筋トレしなさい」
雅也「ほっとけばって、こんなんじゃ仕事にも影響するって。集中してパソコン作業もできないわ」
真保「ご飯できてるからさっさと来なさい（とそそくさと出ていく）」
雅也「ちょっと……」
と、辛そうに足を引きずりながら出ていく。

つづく